支那民族論

著ケルォフ・ドッレフルア
譯　吉　洋　山　高

生活社版

フォルケ著
高山洋吉譯

支那民族論

生活社版

昭和十四年七月四日印刷
昭和十四年七月七日發行

支那民族論
定價 [illegible] 錢
外 [illegible]

印檢者書

生活社版

譯者 高山洋吉
發行者 鐵村大二
東京市神田區鍛冶町三ノ六鍋町ビル
印刷者 渡邊一郎
東京市小石川區東古川町一〇
印刷所 中外印刷株式會社
東京市小石川區東古川町一〇

發行所 生活社
東京市神田區鍛冶町三丁目六(鍋町ビル)
電話・神田三六三五・三六八一番
振替東京四三三〇一番

譯序

本書はアルフレッド・フォルケの支那の民族に關する二つの論策を纏めて譯出したものである。即ち、本篇は支那の民族」(Dr. Alfred Forke;— Die Völker Chinas. Vorträge, gehalten im Seminar für Orientalische Sprache zu Berlin)の全譯であり、附篇は「古代象形文字を基にして見た支那人の起原」(Dr. Alfred Forke;—Der Ursprung der Chinesen auf Grund ihrer alten Bilderschrift.)の全譯である。

著者フォルケ博士については、私は多くを知らない。一八六七年にドイツに生れ、一八九〇年に通譯見習生として北京に赴任、後厦門、上海、天津、等に領事として歷任し、一九〇二年以後上海總領事、北京東洋協會、上海アジア協會の書記となる。この長い外交官生活に於て支那學、殊に支那の哲學、文學の研究に從事し、一九一四—一八年、カリフォルニアのバークリ大學、更に一九二三年以降ハンブルグ大學東洋學教授として、初めて支那哲學史の科學的研究を行ひ、ドイツ東洋學會にミューラー博士亡き後東洋研究の哲學的方面を擔當してその中心をなしてゐる、と云はれてゐる。フォルケの著書としてはこの二論策の外になほ「論衡、王充の哲學論集」(一九〇七年)、支那論集(一九一一年)、「支那文明社會の思想界」(一九二七年)あり、また一九二七年以降主著「支

支那民族史 上卷
林惠祥著
大石・中村譯
定價二圓五〇錢 書留送料廿四錢

支那救荒史
鄧雲特著
川崎正雄譯
定價三圓二〇錢 書留送料廿四錢

支那殖民史
李長傅著
半谷高雄譯
定價三圓二〇錢 書留送料廿四錢

支那商業史
王孝通著
平田泰吉譯
定價三圓二〇錢 書留送料廿四錢

支那交通史論
白壽彝著
牛島俊作譯
定價三圓二〇錢 書留送料廿四錢

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

本篇

支那の民族

——ベルリン東洋語演習科に於て行はれた講演——

序言

東洋語演習科（ゼミナール）の講師によつてこの冬東洋の民族及びその文化を比較的廣汎な公衆に近づけることを目的とする公開講演の連續講義が開かれた。最初の兩度の講演に於て著者は支那の民族について話した。この講演は興味を以て迎へられたようであつたから、著者は諸方面の勸奬に從ひ、これを印行する氣になつた。最初は印刷することなど意圖してはゐなかつたのである。斯くして生れたこの小冊子はもとより學術的論文たることなど欲してはゐない、たゞ支那の知識を廣く傳へることを以て滿足するのである。支那の住民に關して支那學者以外の教養人の知識は一般に甚だ貧弱であり、貧弱であるばかりでなく、それに關して誤つた考へが行はれてゐる。この記錄は最近の政治的事件によつて興味の中心に押出されたこの民族に關して知り置くべき最も重要な事項を纏めたものであり、著者自ら經驗及び、信憑すべき、そしてその中の或るものは萬人が萬人容易に近づき得ると云ふわけには行かぬ廣汎な外國語の典據を基礎にしてゐるのである。

一九〇七年一月、シャルロッテンブルグにて

アルフレッド・フォルケ

支那帝國（Das chinesische Reich）の住民はすべてモンゴール種族（mongolische Rasse）に屬する。それはアジア及び中央アジア、西アジア草原、印度支那及び北國に分布してゐるアジア最大の人種である。モンゴール種族の發祥地は多分中央アジアの草原地域であらう、尠くともこの假說が立てられてゐるのである。中央アジアのオアシスに於てはモンゴール人の祖先が遊牧生活の狀態—この民族の一部のものは今日もなほこの狀態にあるのであるが—から農耕の狀態に移つてゐると云はれてゐる。モンゴール民族（m. Völkerschaft）は最古の時代以來、この發祥地より出て、周圍の國々へ擴がつて行つた。彼等は野蠻な騎馬集團としてヨーロッパ及び印度へ來、禮節ある農耕民として支那の低地へ來、日本や印度支那へ來た。然し、原始モンゴール人（Urmongole）の移動については、それを證明すべき歷史的證據がない。この點、各國に於て學者達によつてあれほど色々に變へられてゐる發祥地を有つアリアン人の移動についてと同じである。それ故にまた、中央アジアを以て發祥地となす假定は多くの者によつて論爭されてゐるところである、そして支那人は彼等には原住民と思はれてゐるのである。

支那を言ふ場合、支那本土、所謂十八省とその從屬地方、若しくは植民地とが區別されるのが一般である。それは滿洲、蒙古、東トルキスタン及び西藏である。これに對應して支那の住民も、—支那人、滿洲人、蒙古人及びトルコ民族に分けられてゐる。

支那人はその數多く、政治的であり、且つ文明國民として遙かに優越してゐるので、吾々は彼等を稍々立入つて取扱ふであらう。支那人の數は三億乃至四億と評價されてゐるが、正確な、深く信憑出來る統計はない。滿洲人は滿洲には僅かに百餘萬しかゐない、蒙古人の數は精々三百萬と計算され、東トルキスタン及びヅンガリー（イリー）には精々二百萬人、そして西藏には百五十萬人しか住んでゐない。支那の朝貢國のおそろしく大きな國土は、右に述べたところからもわかるように、極く僅かの住民しか有つてゐない。そして大部分遊牧民である。これらの國々の住民は、支那人に對比しては、殆んど何等の役割をも演じ得ないのである。文化に於ても彼等は支那人に後れてゐる。文化の程度に從つてモンゴール人種は普通、開化民族（Kulturvölker）半開民族（Halbkulturvölker）、純遊牧民及び自然民族の四段階に分けられる。開化民族に屬するものは、支那人、日本人、朝鮮人及び印度支那人である。半開民族は蒙古人及び西藏人であり、純遊牧民は、―トルコ部族（Turkstamm）、キルギス人、トルコマン人（Turkmen）であり、そして自然民族は、―ツングース人、サモエド人、カムシャダール人その他、ロシア領東シベリアに住む部族である。

言語を區別の標識とすると、全く異つた編制が得られ、モンゴール種族の中の民族で、吾々のように變化語（flektierende Sprache―語尾その他の變化をなす言語―譯者）を有するものは一つもなく、彼等の言語は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

或るものは單綴語であり（ein silbig）、或るものは膠着語である（agglutinierend）。單綴語、膠着語及び變化語の間の差異は周知の如く次の點である、—卽ち、單綴語は支那語のように變化せず、不變の語源だけで用をなす。膠着語はトルコ語のように根源を不變のまゝ互に接ぎ合はせて變化させられる。

最後に變化語は、語幹に前綴及び後綴を接ぎ合せて變化させられる（deklinieren und konjugieren）が、その際音を延ばしたり、音を變へたり、子音や母音を變へたりして語根は多樣に變化せしめられる。最初は曲げの語尾もまた語根以外の何ものでもなかつたのであるが、それを認識することは獨り言語の研究家のみのよくする所なのである。

さて單綴語を有つてゐるのは所謂印度支那民族、卽ち支那人、印度支那人及び西藏人であるが、之に反して膠着語はウラルアルタイ民族—蒙古人、滿洲人、タヽール人及びトルコ部族、日本人及び朝鮮人がそれに數へられてゐる—の言語である。素人は通常支那語は日本語に甚だ類似してゐるものと想定してゐる。この想定は日本人が歷史的時代に於て、吾々が多くのラテン語やフランス語を吾々の言語の中へ受入れたように、支那の文字を、そしてそれと共に多くの支那語を借りて來たと云ふ限りに於てのみ、正しいのである。言語の構造に於ては支那語は日本語とは同屬ではなく、反對に安南語、緬甸語及び暹羅語に酷似してゐるのである。純粹の日本語は大部分多綴語であり、支那語は皆單綴語である。

さて先づ、吾々の見たように「天國」の住民の主要大衆をなしてゐる支那人に眼を向けよう。この支那人と並べては他の蒙古諸民族は殆んど物の數に入らぬのである。

支那人は體格では虚弱な印度人（ヒンヅー）とヨーロッパ人との中間に立つてゐる。よい體軀を有ちそして均齊がとれてゐる。擔夫や車夫の間に往々に見事な、武張つた體格の者が見出されるのであるが、それに比べては日本人の如きは矮人のように見えるのである。支那人は日本人や印度人のようでなく釣合のとれた脚を有つてゐる。日本人の脚は短過ぎ、印度人の脚は錘のように細い。身長では北支人と南支人との間にかなり著しい相違が認められる。揚子江以北の支那人はヨーロッパ人と同じく身長が大であるが、揚子江以南では彼等はずつと短身である。北支では往々街上で眞の巨人が見られる。

支那人の肌色は區々である、地方や生活樣式の異るに從つて黄色であつたり、白色であつたり、または褐色であつたりする。北支人は概して、殆んど熱帶的な氣候の中で生活してゐる南支人よりも淡明な肌色をしてゐる。南支では全く見られない氷や雪を有つた北支の冬は、淡明な皮膚色を保つによいことは言ふまでもない。北京では紅色の頰をした蒙古人ばかりでなく紅色の頰をした支那の小兒も見出される。多く野天で働いてをり、暖かい季節の間はいつも上體を露出させて物を擔いでゐる支那人は、チョコレートのような褐色をしてゐることも珍らしくない。そうした肌色は勿論官吏や書齊學者にはない。

支那人は特に黄色であるなどと主張することは、本來は出來ないのであつて、「黄色人種」(„Gelbe Rasse")なる表現も極めて適切と云ふわけでもないのである。黄色と云ふ色は大多數の支那人の肌色ではあるが、同じ蒙古種族の中の支那人の同屬である安南人、暹羅人及び日本人の方がずつと黄色である。黄色は、支那人とヨーロッパ人との結婚から生れた混血兒、所謂ハーフ＝カスト（Half-casts、混血兒、特にヨーロッパ人の父と印度人の母との間に生れたもの―譯者）に目立つて現はれる。何處でもそうであるが、支那に於てもこの混血兒はあまり尊敬される地位を占めてはゐない。この混血兒はポルトガルの植民地マカオの住民の大部分を占めてゐて、純血ヨーロッパ人と云ふのは其處では本來たゞ官吏、僧侶及び軍人だけであるから彼等は略してポルトガル人とも呼ばれてゐる。ヨーロッパ人は彼等と往來（ゆきき）しない、そして支那人も彼等をあまり尊敬しない。商會ではこの混血人は僅かに低い地位にあつて簿記掛（コントリスト）として使はれてゐる。この混血兒は改訂版の支那人とも見做されず、また品質のあまり上等でないヨーロッパ人とも見做されずに、その兩親から主として惡い性質を受繼いだものと考へられてゐるが、この評價は多くの場合に於ては正鵠を得てもゐるのである。

支那人の頭髪はこく、滑らかで且つ黑い。大多數の蒙古人のように、彼等にも極く僅かの髭しか生えない、而かも彼等は老年になつて初めて髭を立てる。四十歳を越えて初めて髭を立てるのが習慣になつ

てゐる。支那人の鼻下髯は長く、そして悲しげに垂れ下つてゐる。「事成れり」(„Es ist erreicht")髯(譯註)は、まだ支那中をその勝利の行進をして歩いてゐない。こんな髯が街頭を濶歩したら、鼻下髯の尖端ばかり元氣な或るドイツ人の場合に於けるよりももつと似合はなかつたであらう。

(譯註)茲に「事成れり」髯と云ふのは得意然たるカイゼル髯のことであらう。

支那人獨特なのは辮髪である。よく支那人の特徴と見做されてゐるこの假髪—イギリス人はそれを言ひ表はすに屢々豚尾(Pig-tail)と云ふ蔑稱を用ゐてゐる—は、最初は滿洲人のもので、十七世紀の中葉になつて初めて滿洲の侵略者によつて支那へ持ち込まれたものである。辮髪をつけることは服從と忠誠との象徴とされてゐた。昔の支那の髪容は朝鮮のそれに似てゐた。それ故時の王朝に對して反抗する反逆者は、その頭髪を自由に、長く伸ばすを常としてゐるのである。例へば前世紀の五十年代に於て太平の亂の暴動者が頭髪を伸ばしてゐた、それ故彼等は公式には「長髪賊」と云はれたのである。彼等は頭髪を自由に伸ばし、辮髪に編まなかつたと云ふ意味なのである。

頭髪の成長を促すために、支那人は額をつるゝに剃らせる。辮髪が十分な長さに伸びてゐないと、入れ毛をしたり、先端に黑い絹紐を編み込んだりする。支那人が普通脱がずに被り通してゐる帽子に直

接縛りつけられた假髢もある。頭髮を剃るのと辮髮を編むのとは理髮師の仕事であるが、この理髮師は石鹼を使はずにたゞ湯と實に鈍い剃刀とだけで剃るのである。この剃髮は多くは八日に一度しか行はれない。

辮髮をつけてゐることに對しては、最近進歩的支那人、殊にシンガポール、サンフランシスコのような植民地にゐる支那人も強く反對した。彼等は、辮髮は支那人が外國人に輕蔑される理由の一つだと考へてゐる、そしてその考へは間違つてゐないのである。それ故外國にゐる支那の學生は既に大部分、日本の例に倣つて、ヨーロッパ風の髮容をしてゐる、或ひは尠くともその辮髮を鬘の後に隱し込んでゐる。政府が現在斯くの如く改革運動をやつてゐるけれども、そのことは決して、再三辮髮を廢止すべき旨が布告されることを妨げなかつたのである。新軍隊の士官は既に辮髮をつけてゐない。

支那人の眼は黑く、そして稍々裂け込んでゐるが、裂け込みは蒙古人や日本人よりずつと尠い。それが殆んど氣付かれないこともある。眼瞼が內側に、鼻の方に向つて僅かに開いてゐるために、眼球の一部が蔽はれたまゝになつてゐる。裂け目の程度は人によつて異る。北支人よりも南支人に、男子よりも小兒や婦人に著しいようである。日本畫にある裂け込んだ、つり上つた眼はひどく誇張されたものである。あんな眼は日本にもないのである。然し、日本人があの種の眼を甚だ美しいものと考へてゐること

はわかるのである。

支那人は多く頰骨の張つた圓い顏をしてゐる。鼻は平たくて廣く、唇はヨーロッパ人よりは稍々厚いが黑人に於けるほどではない。手は長くて細い。鷲鼻は甚だ稀らしいが、あることはある。ユダヤ人風の鼻も時々見受けられる。支那人はその手の手入れに特に意を用ゐてゐる。支那人は普通手を長い、幅廣の袖の中へ隱してゐる。支那人は手袋と云ふものをつけない。彼が指の爪を一吋か二吋も長く伸ばしてゐることもあるが、それは當人が良い生活をしてゐて力仕事をしたり、その手仕事で生計を立てたりする必要のないことを誇示してゐるのである。文士の間ではこの習慣は時々見られるが、この習慣とて普遍的なものではなく、それほど優美なものとされてもゐない。婦人は普通その長い爪を銀の鞘で保護してゐる。

支那の婦人は概してヨーロッパの婦人よりずつと小さい。彼女等が吾々の美の理想に合することは稀である。男子の服裝とあまり變らない彼女等の服裝——男子と同じく彼女等も多くの場合長い、踝(くるぶし)の周りを堅く縛つたズボンを着けてゐる——も、それほど軀に合つてゐない。支那の婦人はいつも厚く脂粉を塗つてゐる。頰は白や赤に塗り、唇には紅をつけ、眉毛は三日月型に黑く染めてゐる。幼い少女と老姿だけがこの化粧から免がれてゐる。支那の美人は巴旦杏の花のような頰を有ち、杏の花のような唇を有ち、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com